

大阪インターナショナルスクールにおける「日本語教育実習」

～ 10年の歩みを振り返って～

原和久

OIS 日本語科

1. はじめに

教育実習は、専門職としての資質を育成する大学の教師養成教育の「仕上げ」として欠くことのできないものである。日本語教育の分野でもその重要性は早くから認められ、多くの大学が教員養成課程の最終段階として教育実習を学生に課している。日本語教育においてはその法的位置付けが曖昧なこともあって、日本語教師になるための教育実習が実際どのように行われているかは一般にはあまり知られていない。しかし、近年のインターネットの普及に伴って、実習生による単年度の教育実習報告書や大学の担当教授による教育実習報告なども比較的容易に閲覧する事が出来るようになってきた。これまで大学内部のみに公開されていた論文や資料が外部に公開されることによって、各教育機関における実習プログラムの詳細も次第に明らかにされてきている。また、取り組みの傾向として成人学習者や留学生に対する日本語教育のみならず初等・中等教育の場で外国人児童・生徒を対象に実習に取り組む大学も少しずつみられるようになってきた。実際、色々な大学の様々な取り組みを見てみると、とても参考になるものが多い。(1)しかし、その多くは実習参加者による授業分析や体験報告、大学における実習担当教官の視点からの実習プログラムの分析や改善点を論じたものがほとんどであり、実習生受け入れ教育機関の側から教育実習の意義や問題点を考察したものはあまりない。その結果、受け入れ先の実習担当教諭がどのような考えに基づいて実習指導を行っているのか、といったことについては何も明らかにはされておらず、多くはブラックボックスのままとなっていることが多いようである。教育実習が、それに関わる全ての参加者にとって意義のあるものになるためには、受け入れ校側の担当教諭はもちろん、実習の対象となる生徒やその保護者、また日本語クラス以外の学校文化をも含めた総合的な理解と分析が不可欠であると思われるのだが、そのような研究は現在のところごく一部に限られているようである。

筆者の勤務する大阪インターナショナルスクール日本語科は1995-96学校年度以降、大阪外国語大学より教育実習生を毎年受け入れてきた。「児童・生徒に対する日本語教育」は日本においては比較的新しい研究分野であり、本校における「教育実習」も当初は試行錯誤しながらのスタートであったが、10年の実践を経て実習生受け入れ校としての態勢もようやく整備されてきたように思われる。同時に、単に実習生を受け入れるだけではなく、実習生受け入れ校として積極的に日本語教育界に発言し貢献していくことで、さらにしっかりした受け入れの基盤を整備していく必要性も感じられた。主体性をもって実習生を受け入れるには何が必要か？保護者や生徒に満足してもらえるような実習とは何か？受け入れ校と大学の役割分担はいかにあるべきか？大学での日本語教育と現場の実践のよりよい交流をめざして、実践の現場からも教育実習に対して問題提起を行うことで、プログラムをさらに質の高いものにしていく必要があるのではないかと思われたのである。残念ながら、本論文では上記のような問題点について十分に論じられてはいない。ここに書かれているのは、そのような問題点を今後の課題として認識するに至った過程である。本論文は、これまでの実践の成果と課題を整理し実習生受け入れ校の視点から10年の歳月を振り返ることで、より良き実習プログラムの姿を思い描くための基礎資料として執筆したものである。

2. 本校の日本語教育実習の位置付け

2.1. プログラム開発の経緯 大阪外国語大学との連携

インターナショナルスクールは民間の日本語学校と同じように、生徒からの授業料と企業等からの寄付によって運営されている。したがって、税金を使って運営される公立の学校のように教育実習生を受け入れる法的義務はない。また、留学生センターや付属小・中・高校など大学付属の研究教育機関でもない本校にとっては実習生を受け入れる道義的根拠もない。しかし、大学で日本語教育を専攻した卒業生の多くが内外の教育機関に就職していることを考えると、大学生の時にいずれかの教育機関で実習体験を得る事が学生にとって非常に有益な体験になるであろうことは容易に理解される。日本語教育実習の受け入れ先を探していた大阪外国語大学から受け入れの強い要望があったとき、それを承諾し全くのボランティアで受け入れることを決めたのは、学生時代に現場での実習を受ける事が出来ず、現場に入ってから苦労する日本語教師がいかに多いか、我々自身が体験から学んでいたからである。

当時(1996年5月)の資料によれば(2)、大阪外国語大学・国際文化学科日本語講座(以下、「外大」)

と本校大阪インターナショナルスクール（以下、OIS）は「教育研究の協力と交流を推進する」という目的のもと、「交流に関する一般的な協定書」を交わし、次の諸活動を奨励することを約束している。（資料1）

- (1) OIS は外大日本語講座に対し、日本語教員養成のための協力をを行う。
- (2) 外大日本語講座は OIS に対し、カリキュラム開発、教員研修のための協力をを行う。

文面から明らかなように、協定書は「ギブ・アンド・テイク」の関係によって両校の交流を促進しようとするものであり、本校における教育実習は、上記の「日本語教員養成のための協力」の一環としてこの 10 年間実施されてきた。(3) 大阪外国語大学は、上記のような協定を海外の大学や民間の日本語学校などとも交わしそれらの教育機関に実習生を派遣しているが、初等・中等教育機関で外大の学生に「教育実習」の機会を提供してきたのは、現在のところ OIS だけである。（真嶋 2000b）

2.2. 大阪外国語大学の日本語教師養成プログラムについて

大阪外国語大学外国語学部・国際文化学科で「日本語」を専攻する学生は、日本語教育学・日本語学・言語学・対照言語学・日本文学の専門知識を基礎として、教育実践の経験を積むために「日本語教育学特論」（模擬教壇実習）を受ける。（真嶋 2000a）ここで実際に日本語を教えるとはどういうことかを体得した後に国内・国外の日本語教育機関での「教育実習」に臨むことになっている。2003 年現在、国内では本校以外に京都日本語学校が、また国外ではアメリカ・ドイツ・英国・中国などの大学が、外国語大学と交流協定を結んで実習の場を提供しているようである。(4)つまり、大阪インターナショナルスクールでの教育実習は、大阪外国語大学の日本語教師養成プログラムの最終段階に提供される実習のための受け入れ校の一つとして、大阪外国語大学の日本語教員養成プログラムの一端を担うものとなっている。実習生の選考については、学生の希望と大学教授との話し合いによって大学側が決定しており、毎年 2～3 名の実習生受け入れについて本校に打診が入るよう連絡をとりあってきた。一般的に言って、実習のスタイルには「実習のためにクラスをつくる」ものと「実習生が既存のクラスに入る」ものがあるとされる（亀田・金久保 2003）が、本校での教育実習は後者のタイプにあたる。学習者は実習受け入れ担当教諭の日本語クラスに在籍する幼稚園から 12 年生までの様々な日本語力（ゼロ初級～日本語母語話者）を持つ児童・生徒である。実習生の受け入れは 1995-96 学校年度にまずテストケースとして 2 名を受け入れ、その後も毎年 2～3 名の実習生を受け入れてきた。OIS には 3 人の常勤教諭と 3 人の非常勤教諭がいるが、授業以外の負担を非常勤の教諭にかけることは出来ないため、実習生は常勤の 3 人が年に一人ずつ受け持った。2004 年 12 月の時点で総計 25 名が OIS で実習を受け、ほとんどの卒業生が現在日本語教師として世界各地で活躍している。

3. 本校における実習プログラムの実際

ここでは、筆者が 1997-2004 年に実習の指導を担当した学生 8 名について、その実習の実際を概観してみたい。8 名は、いずれも大阪外国語大学国際文化学科に在籍し、日本語教師養成課程のための規定の授業科目を履修してきた大学 4 年生（当時）である。

3.1. 大阪インターナショナルスクールの特徴と実習の目的

大阪インターナショナルスクール(OIS)は、関西圏に住む外国人子弟を対象に、国際バカロレアのカリキュラムに基づいて幼稚園から 12 年生までの教育を行っている。(5)本校は「外国人生徒・帰国子女・一般生徒」が共に学ぶ千里国際学園・中等部高等部(SIS)と校舎を共有する国際学校として 1991 年に創立された比較的新しい学校法人である。OIS は英語、SIS は日本語が教授言語であるが、音楽・芸術・体育・情報・生徒会活動などは合同で行っており、いわゆる「多文化・多言語」環境の中で様々な先進的取り組みを行っている。日本語教育との関連でいえば、多様な背景を持つ児童・生徒に対する教育を「第二言語習得理論」・「バイリンガル教育」・「母語保持・継承教育」、また国内の「国語教育」や「文学教育」にまで目配りしながら、ゼロ初級の生徒から母語保持教育としての日本語教育までを行っている全国でも数少ない日本語教育機関である。(6)

上記のような特色ある教育を反映するために、本校における教育実習の目的を下記のように設定した。

- (1) 多様な背景を持つ児童・生徒に対する日本語教育が、大阪インターナショナルスクールにおいて、どのように実践されているか授業観察および教授体験によって理解する。
- (2) 多文化・多言語環境下の初等・中等教育という枠組みの中における、日本語教育と日本語教師の役割を再認識する。
- (3) 「日本語教育と国語教育」、「児童・生徒に対する日本語教育と大人に対する日本語教育」、「民間日本語学校の日本語教育と国際学校における日本語教育」などの違いを、教えることを通して認識する。

3.2. 生徒の特徴

最近では、日本人の中にも我が子をインターナショナルスクールに通学させたいと願う保護者も増えてきている。実際、インターナショナルスクールはいわゆる一条校ではないため文部科学省のカリキュラムに従う必要はなく、相当に柔軟な教育が行われており、生徒たちも積極的に発言しユニークな発想をする生徒が多い。しかし、「日本」にありながらインターナショナルスクールという「日本」でない空間で学習するということは、実はそんなに簡単なことではない。なぜなら、ほとんどの生徒は保護者の都合で日本に来た子供たちなのであり、留学生のように本人の意思で明確な目的を持って日本にやってきたわけではないからである。生まれ育った「ホームタウン」を離れてやってくるわけであるから心理的にも複雑なものを抱えている生徒も少なからず存在する。言語的にも、学校では英語、校外では日本語、家庭では母語というように使い分けなければならない、文化的にも、日本の文化とも親の文化とも違う自分自身の「第三の文化」をどう捉えたらよいか戸惑うものもいるようだ。「日本」という異国に来て自分自身を見失わず、しっかりと自分自身の立場を理解し、アイデンティティーを形成できる生徒はむしろ少数かもしれない。インターナショナルスクールの生徒に対する日本語教育の難しさは、子供達の置かれた矛盾した立場を大きく反映していると言えよう。このような背景を考えると、インターナショナルスクールで教える場合、文化庁が作成した「日本語教員養成において必要とされる教育内容」(文化庁 2000)に含まれている日本語教授法や日本語学、言語学の知識に加えて、児童心理学や発達心理学、また異文化間教育などの分野についての科目を大学で履修しておく事が望ましいと思われる。

3.3. 実習の時期・期間について

OISは海外からの年間を通しての転入生に対応できるように、学年の始まりを9月とし各学期60日からなる3学期制を採用している。一学期(9~11月)は、担当教諭にとっても、新しいクラスの生徒たちとの人間関係を築き一人一人の生徒についての文化的・言語的背景を授業を通して把握する期間である。そのため担当教諭にとっても生徒の心理が十分に理解できているとは限らず、クラス内に大きな不安定要素を持ち込む実習の期間としては適しているとは言い難い。また、大学4年生に対する実習は、3月末までには成績を出さなければならないという大学側の事情があるため、教育実習が可能となるのは例年12月から2月下旬までの間の3ヶ月間程度である。しかし、12月は年度末の行事(ミュージカル)や冬休みがあり、年が明けてからは書き初め大会などがあるため、2週間というまとまった時間がとりにくい。このような事情から、OISにおける実習は例年1月後半から2月下旬にかけて行っている。一年に常勤の担当教諭一人に対して一人の実習生しか受け入れることができない理由も時期的な制約によるところが大きい。1月後半から2月にかけては、大学生にとっては卒論の締め切りや口頭試問、就職活動とも重なる時期であり、毎年学生にとっても担当教諭にとっても忙しい中を縫っての実習となっている。

実習の期間については、大学側と当時の本校の校長との間の当初の話し合いで2週間になったようだ。これは、日本の教職免許を取るための実習が当時2週間であったことに準じたものであるようである。2週間という時間は集中して教授体験を得るのに適当な時間ではあったが、後述の実習生のアンケート結果からも伺えるように、より長い実習期間を望む実習生の声も聞かれた。

3.4. 教育実習の事前指導

2週間の実習期間の中で、何日授業見学を行い、どのレベル/学年のどのコースを何時間実際に教えるか、については実習生の希望・能力・やる気・将来の進路・専門性などを考慮しながら話し合いによって決定した。そして、最近では実習が始まる2ヶ月ぐらい前から週に一回のペースで授業を見学・補助し生徒の日本語レベルを把握するように指導している。これは、2週間という限られた時間を教壇実習に有効に使い余裕をもって実習に臨んでもらうための措置である。また、このことは実習生にとって生徒の性格や言語的背景への理解を深めるばかりでなく、生徒にとっても新しい実習生に慣れる上でと

ても効果があった。

授業内容については、こちらからトピックや文法項目、あるいは教材を提示するのではなく、子供たちにとって何が今一番必要かを観察を通して自ら考え、実習生自ら教授内容を選定し教案・教材を作成するように指導した。教材の選定(作成)にあたっては、「生徒にとっておもしろい単元か」「レベルは適当か」「6回の授業で完結することができるか」といったことを考慮し、「なぜその教材を使うのか」理由を明確にするように伝えた。実際に現場に出て戸惑うことは生徒のレベルを把握することと、生徒のニーズに合わせて教材を選択(作成)し教案を用意することであり、それが出来なければ一人前の教師ということは出来ないだろう。そのような考えから、「教える前提として教案がきちんと書けていること」と、「教材の準備が整っていること」の二つを実習生が教壇に立てる条件とした。教案がなければ、たとえ授業がうまくいったとしても、それが意図されてそうなったのか偶然なのか判別できず(したがってフィードバックもできず)教授技術の向上に結びつかないからである。また、教案はなんらかの事情で学校に行く事ができない場合に代理教員に授業の内容を文書で伝えたり、保護者や教務主任・校長などに授業内容を説明したりするための手段でもある。その意味で教案の執筆は2週間の教壇実習の中でも最も重要な作業と位置付けた。教案の形式については特に定めず自由としたが、実際、学生が書いた教案を見てみると、初めのうちはほとんどのものが「教室内で教師が生徒に発するキュー」を記した「せりふ集」となってしまっている事が多かった。自分自身では何のことが分かって、一時間の授業の展開や単元全体における位置付けが明確に記されておらず、授業で何をやりたいのか分からないものの中にはあった。そこで、教案は、各コースそれぞれについて「単元案」と「授業案」を作るように改めて指導し、「単元案」には「学習目標」「導入語彙」「導入文法」「教材」「参考図書」「評価方法」「2週間の時間配分」などを、また「授業案」には、各授業ごとの「授業の目的」「導入する文法・語彙」「時間配分」「生徒の学習活動」「キーとなる教師の発問」「板書案」「評価方法」「注意事項」などを記入させた。(資料2、資料3)

教案を書く指導を通して実感したのは、単元の目標や授業の目的についてきちんと書ける実習生があまりいなかったということである。これは、現職日本語教師一般についても言えることであるかもしれないが、なぜある表現や文法を導入しなければならないのか?その文法項目が子供にとってどのような意味を持つのか?といったことを十分に考え、単元案や授業案を論理的に構成できる実習生は少なかった。例えばある実習生は、単元の目標を「て形を作る事が出来るようになること」としたが、ではなぜ「て形」を教えなければならないのか?という問いにはうまく答える事が出来なかった。少し考えればすぐに分かるように、小学校のクラスで「て形」を初期の段階で導入するのは、例えば、それが友達を作るのに必要な表現だからである。「いっしょに、あそんで!」「あした、あそびにいったもいい?」といった表現が出来れば、子供は友達を作る事が出来るだろう。つまり、子供にとって最も大切な学習の動機や目標は「友達をつくること」であって、文法項目として「て形」それ自体を理解することではないはずである。成人のクラスであれば、「て形の理解」が単元の目標となりえるが、子供の場合は「子供にとって」意味のある目標を与えることが大切である。また、そのように考えれば、重要となるのは2週間(約6回)の授業によって子供が新しい友達をつくる技術を身につけたかどうかであると言える。その意味で、単元案や授業案には「言語的な目標(目的)」とともに「社会的・情緒的目標(目的)」についても記すように実習生に指導した。日本語の教師として現場で働く際にもっとも大切なことは学習者の言語的・社会的・情緒的ニーズを的確に把握し、学習者にとって一連の流れのある意味ある学習の場を作り出すことにあると考えられる。また、いかに生徒をやる気にさせ、意味ある学びとして次の学習へと繋がる達成感を得させるかについても考える必要があるだろう。8名の実習生たちが3年生から8年生までの各日本語のクラス(中級)で取り組んだトピックは資料4の通りである。

ところで、実習の実施については、年度当初に保護者に説明しシラバスに明記したが、実習開始の1週間前にも改めて保護者に手紙を送り協力を要請した。また、学内の教員にも実習期間を周知させるためにEメールを送ったり、実習初日に実習生を朝のミーティングで紹介したりした。期間中は、日本語科以外の教科の教員たちも実習生に声をかけるなど多くの教員が実習プログラムに協力してくれた。

3.5. 実習中の指導と評価

本校の日本語コースは3年生から8年生までの場合、一週間に45~55分程度の授業が週3回行われる(7)ため、二週間で一コースにつき6回(270~330分)の実質的な教授時間をとる事が出来る。実習中、実習生は原則8:30a.m.から5:00p.m.までは学校に滞在し、授業の合間は授業の準備をしたり教材を作成したりして時間を有効に使わなければならない。5:00p.m.以降は特に学校に残る必要はないが、ほとんどの学生が放課後も残って教材開発に取り組んでいた。また、実習の成果を確認するため、毎日教壇実習の後に反省会をもってその日の授業について実習生とディスカッションをした。基本的には、授業の良かった点と改善点を実習生に述べてもらい、担当教諭が気付いたことをアドバイスすると

いう形をとった。教壇実習はなるべくビデオテープにとり、実習の空き時間を使って分析するように実習生に促した。また、実習の最終日には日本語科の他の教諭を招待して研究授業を行い、先生方の批評をいただくように指導した。(資料5)単元の終了後は実習生が担当したクラスの生徒に実習に対するコメントを書いてもらい、後日お礼を兼ねて手紙の形式で実習生に手渡すようにした。

実習中に作成する教材は、実習修了後も本校日本語科の教師達が使用できるようなものを作るように指導した。また、年度によっては、実習生に教壇実習とは別の時間をとって12年生に対して大学の卒業論文を紹介してもらうこともあった(55分)。本校は、卒業前の12年生に卒業論文を書くことを課しているが、彼等の良い刺激になればと思い実習生諸君にお願いした。難しい専門用語を使わずに分かりやすく高校生に専門的な内容を説明するのは以外に難しく、実習生にとっても良い体験になったようである。筆者が担当した学生は、すべて2コース以上のクラスで教壇に立つことが出来ているので、すくなくとも540時間、多い学生では4コース990時間の授業見学や事前指導を含めない実質的な教壇実習を行うことができた。

3.6. 実習生の評価

大学側の資料によると実習生の最終的な評価は、以下の3点の総合評価とされている。

- <1> OISの指導教官による評価(A B C D)
- <2> OISにおける実習期間中の実習および見学の報告書
(OISに一部、大学側に一部提出)
- <3> 実習期間以外に行ったOIS及び他機関における授業見学・実習等の報告書

このうち<1>については、実習期間中の学習指導、生徒指導、勤務状況及び提出された実習報告書を総合的に考慮してOISとしての成績をA B C Dで出している。評価表は、当初はレターグレードにA4用紙一枚の講評をつけて大学側に送付していたが、実習担当教諭の負担を減らすための大学側の配慮として1998年度より「教育実習成績評価表」を使うようになった。この「教育実習成績評価表」は、実習生による実習活動を「学習指導」「(生徒の)生活指導」「勤務状況」の三点から評価するものであり、それぞれの項目について評価を出し、その上で総合評価をだすようになっている。(資料6)「教育実習成績評価表」はもともと教科教育で使用されているものであり、日本語教育やインターナショナルスクールの実情を必ずしも反映したものとはなっていない。例えば「生徒の文化的背景に対する配慮」や「実習生の言語運用の能力」など、日本語教育や本校のようなインターナショナルスクールでは必ず必要となるであろう項目についての記述がないのは残念である。どのような観点から、どのような評価を行うべきか、どのように実習生の成果を記録するべきか、現在の成績評価のあり方に満足することなく、今後も研究を続ける必要があるだろう。

実習開始から実習修了、大学への評価提出までのスケジュールをまとめると次のようになる。

表2 実習開始から終了までのスケジュール

10月	<ul style="list-style-type: none"> 大学の教育実習担当教官による実習生の決定。OIS への連絡。 実習生による授業見学の開始 ハロウィーンやコンサートなどの学校行事を見学
11月	<ul style="list-style-type: none"> 一週間に一度程度クラスを見学して生徒のレベルを把握。 (見学する場合は2日前までに連絡をして確認) 子供にとって意味のある活動が何か、実習で何ができるかを考えながら、クラスに参加。教授補助をしながら単元案を構想
12月	<ul style="list-style-type: none"> 単元案の決定 教案の作成開始 実習担当教諭のアドバイスを受けながら、教案を推敲 教材を選定し実習担当教諭に報告
1月	<ul style="list-style-type: none"> 教案の最終稿を実習担当教諭に提出。 プリントなどの補助資料を作成。 最終打ち合わせ
2月	<ul style="list-style-type: none"> 実習スタート 実習レポートの執筆・反省会の記録 研究授業
3月	<ul style="list-style-type: none"> 実習報告書を実習担当教諭と大学に一部ずつ提出 実習担当教諭から大学へ 実習の評価を提出 実習生へ大学による成績の付与

4. 実習生派遣側のプログラムに対する評価

4.1. 大学教育実習担当教官の声

本校における教育実習が実習生送り出し側の大学でどのように位置付けられ、どういった点で評価されているのかを確認するために、筆者は大学で教育実習を担当している先生方をお願いし実習の成果について大学の立場から論評していただいた。幸い、大学側の教育実習担当教官である真嶋潤子教授より資料7のようなコメントをいただく事が出来た。

コメントでは、インターナショナルスクールでの日本語教育実習という比較的新しい試みに大学側が対応しきれていない部分があることを率直に認めながらも、本校での教育実習にメリットを見出し、前向きに取り組んでいる様子が窺われる。特に「現場で求められる能力や資質」といった「実践知」は、大学での学業では得難いものであり、その点で本校における教育実習のプログラムが大学の役に立っているということは、教育実習の本来の目的に添ったものであるといえよう。ただ、コメントから大学が望んでいるそれらの「能力や資質」が具体的に何なのかを知ることは難しい。現段階では、大学側にとっても受け入れ側にとっても、それらを特定できていないのが実情であろう。しかし、教育実習の成果が一過性のものに終わらないようにするためには、大学側と実習生受け入れ側が協力することによって、それらの「能力」や「資質」を少しずつ明らかにし、記録していく必要もあるだろう。今後取り組んでいくべき課題であると思われる。

4.2. 実習修了生の声

大阪インターナショナルスクールでの教育実習プログラムに参加した実習生からは、どのような声が聞かれるだろうか？実習に参加した学生たちのその後の進路に、本校での教育実習がどのような影響を与えたのかを明らかにするため、また、本校での実習プログラムをさらに良いものとするために、筆者が担当した8名の元実習生にアンケート調査を行い、そのうち6名から回答を得た。(残念ながら2名は卒業後の所在・連絡先がつかめずアンケートの依頼ができなかった。)アンケートの調査項目及び実習生の回答は、巻末の資料8の通りである。

アンケートの結果、大学側の実習担当教官が指摘したように、どの実習生も本校での実習から多くのものを学んでいる事が明らかになった。実習生たちは本校内部で設定した教育実習の目的(第3章を参照)のみならず、実習生の教授能力の向上という大学機関にとっての実習の目的をも達成しているといえるだろう。また、本校での教育実習は、実習生にとってはスキルアップの一つの通過点として認識されており、本校での実習終了後もそれに満足せずさらに他の機関で(特に海外で)実習を続けようとする実習生が多い事も分かった。具体的には、卒業後も海外実習に参加したり、海外青年協力隊に応募し

たり、海外のティーチング・アシスタントとして働いたり、海外の大学院に進んだりしながら、日本語教育に関わっている実習生がほとんどであり、卒業後すぐに国内で定職についているものは1名しかいなかった。学習者のニーズの多様化を反映してか、より高いキャリアを求めるためか、実習で教師としての自覚が深まったからか、あるいは不況で職に就きにくい社会事情を反映してのことか、アンケートの結果からは明らかではないが、いずれにしても実習生たちが実習終了後、大学を卒業してからも、さらに高い専門性を身につけるために努力している様子が窺われる。

表1 卒業後の進路

卒業年	名前	卒業後の進路								
		1996-1997	1997-1998	1998-1999	1999-2000	2000-2001	2001-2002	2002-2003	2003-2004	2004-2005
1997	Y.A.	実習	宗教団体海外部(事務職)に就職		T語学院に就職(日本語講師)					
1998	I.M.		実習	JELEXで米に派遣		不明				
1999	F.M.			実習	不明					
2000	H.K.				実習	中国の大学へ日本語講師として派遣		帰国後、海外青年協力隊に応募 求職中		
2001	N.S.					実習	海外青年協力隊としてハンガリーに日本語教師として派遣		帰国後求職活動 民間日本語教育機関に就職	
2002	W.S.						実習	英国の大学に留学	オーストラリアの大学院に留学 民間日本語教育機関に就職	
2003	W.M.							実習	中国の大学へ日本語講師として派遣	
2004	B.A.								実習 米の大学に留学	

*上記は、実習生へのアンケート調査における<問1>と<問2>を表にまとめたものである。(第6章を参照)

5. 実習生受け入れ側のプログラムに対する評価

5.1. 本校の生徒にとってのメリット

実習生は、教育技術については不安な面があるものの、生徒と年齢も近く、お兄さん・お姉さんのような存在であった。いつも聞いている声とは別の声、別のイントネーション、別の発音で日本語を聞く事ができるということは、生徒にとっては新鮮な体験であったに違いない。また、教壇実習に先立つ見学実習中も実習生が教室にいて、生徒に会話のモデルを示すこともより容易になり、教室活動に弾みをつける事が出来たようにも思われる。また、教壇実習では、担当教諭も思いつかないようなアイデアで生徒を惹きつけるすばらしい実習生も多かった。

5.2 採用候補者の確保

受け入れ側のメリットとして最も大きかったのは、25名の実習生の中から、実習後本校の非常勤講師として採用された学生が3名出たことである。インターナショナルスクールは9月～6月が学校年度であることから、急に講師の空きが出来たような場合後任の講師を探すのに非常に苦勞する。日本在住で能力のある人はすでに職についている場合が多く、日本の学校年度では8月末で仕事をやめることが非常に難しい。一方、海外で募集すれば学校年度の問題は解消されるが、生活費が高い日本へ非常勤講師の身分で赴任してくれる人は稀である。過去に本校の非常勤講師として採用された元実習生の3人は、いずれも実習期間中から非常にすぐれた力を発揮していたことが採用に結びついた。また、児童生徒に対する日本語教育の難しさなど本校の事情もすでに実習中の体験から理解しており、日本語科としても安心して採用することができた。表1にみられるように、年々日本語教師の高学歴化が進んでおり、実際には多くの学生にとってOISでの実習は、実際に職を得るまでの一つの過程でしかない。また、OISで実習をしたからといって、全員が本校で職を得る事が出来るわけでは決してないが、実習生の教育観や人となりを実習を通して知る事が出来たことは、採用候補者を将来に向けて確保するという意味で受け入れ校としての大きなメリットであった。

6. 今後の課題 ~受け入れ側の視点から~

本校と大阪外国語大学との交流協定によって始まった本校での実習プログラムは、その10年の歩みを通して大学の教員養成課程の一部を担い、元実習生へのアンケート調査からも明らかのように大きな

成果を上げてきたといえる。しかし、解決しなければならない課題も多い。本論者の最終章では、特に実習生を受け入れる側の視点からこの10年の取り組みを総括し問題点のいくつかを整理してみたい。

6.1. 理論と実践の良き相互交流をめざして

まず、初めに指摘したいのは、大学で学生が得る<知識>と学生が実習先で教壇に立つために必要とされる<実践知>とのギャップである。「大阪外大-OIS」の実習プログラムの場合、学生は大学で模擬教壇授業を受け一年間マイクロティーチングによって実践的知識や技術を磨いた上でOISでの実習に臨んでいる。しかし、マイクロティーチングは初級の文法事項について大学生を学習者に見立てて行われており、多様な文化的・言語的背景を抱えるインターナショナルスクールの生徒に対して、特に日本語中級～上級レベルの生徒に対しては有効な事前準備とはなりえていないように思われる。真嶋(2000a)も指摘しているように、多様な学習者を対象にしたマイクロティーチングの必要性については認識しながらも、時間の制約もあり大学側としても精一杯というのが本音かもしれない。しかし、実習先にそのような学習者がいる以上、少なくともOISでの実習候補者については何らかの特別の事前指導が大学で必要ではなかっただろうか。外国語大学の学生を実習生として受け入れるようになって10年が経つが、年々生徒も実習生慣れしてきており、ただ教えにくるだけではもはや歓迎されないようになっている。子供達は、その年の実習生が一生懸命にやってくれる人かどうか、教え方のうまい人かどうか、過去の实習生とくらべてその人柄や能力を評価しているようだ。実習は実習生にとっては初めての体験であっても、生徒たちにとっては初めてではないのである。実習生にとっては、前年度までの実習報告をあらかじめ読んで問題点を把握し、すくなくとも前年度以上の授業ができるようによく準備しておくことが大切である。一方実習生を支援する側の大学や受け入れ校にとっては、実習生の実践をどのように次の年に継承していくか、本格的に検討すべき時期に来ているのではないかと思われる。大学における「知識」と学校の教育現場での「実践」が相互にフィードバックし合い、緊密な連携のもと相互のコミュニケーションを深めることで、はじめて実習の質も深まっていくのではないかと思われる。

6.2. 生徒・保護者の信頼を勝ち得るために

もう一つ指摘したいのは、大学学外で実施される日本語教育実習が大学の日本語教師養成プログラムの一部と位置付けられていることから発生する問題である。大阪外国語大学をはじめ多くの大学は受け入れ校のいくつかを「日本語教育実習」という科目の中で選択肢として学生に提示している。それらの選択肢の中から、学生は他の授業を選ぶのと同じ感覚で実習先を選んでいるように思われる。つまり、学生にとっては、授業料を払って「日本語教育実習」という科目を履修しているのであり、大学で学んだ知識や技能を教育現場で実践するために実習に参加する。言ってみれば、実習科目をとることは、日本語教育を専攻した大学生としての権利であろう。しかし、あくまでボランティアとして協力している受け入れ校にとって、実習生を受け入れるのは「義務」でもないし「当たり前のこと」でもない。実習対象となる児童・生徒にとってはなおさらであり、「好きで日本に来たわけでもないのに、なぜ実習生の相手までさせられるのか？」と言われてしまえばそれまでである。成人の場合、実習の社会的意義を理解し、実習生の技術不足などにも理解を示し寛容であることができるが、子供の場合はそううまくはいかない。また、「高い学費を支払って私立の学校に通学させているのに、なぜ実習生の指導を受けなければならないのか」と理解に苦しむ保護者がいても不思議ではないだろう。

もちろん、そのような気持ちを生徒や保護者に起こさせないために担当教諭は、実習生に対して、教案の執筆から教材の作成、教室での振る舞いまで口うるさくチェックし、担当教諭の責任において実習生に教壇に立つことを許可することになる。たとえボランティアであっても、担当教師としては実習生を引き受けた以上、生徒や保護者から苦情が出ればその責任を問われることになるため必死にならざるを得ないからである。生徒や保護者にとっては、期待する教育的成果が達成されたかどうかに関心事なのであって、実習生に成長の機会を与える事ができたかどうか、は二の次とならざるを得ないだろう。その意味では学校教育における日本語教育実習の評価は、(特に実習生を受け入れる法的、道義的根拠の無い私立の教育機関に置いては、)実習生や派遣先の大学にとってではなく、生徒や保護者にとって満足の行くものになったかどうかを問うものでなければならないと思われる。生徒や保護者の評価をどのように次の年の実習プログラムに反映していくか、現段階では方法論的にも確立されているとはいえない。

ところで、生徒や保護者に「この人に日本語の教師になってもらいたい」「実習の場を提供してあげたい」と思ってもらうためには、2年生、3年生の段階から外国人児童教育へのボランティアに積極的に関わるなど、教育現場との関わりを深めていく事も大事ではないかと思われる。大阪外国語大学を例にとれば、学生の多くは、大学1・2年次で各自の専攻外国語を学んだ後に3・4年次で日本語について専門的に学んでいる。その豊かな外国語の知識やすばらしい教授陣のリソースを活かすことができ

ば、児童の母語保持教育や保護者の日本語支援などにもっとコーディネーターとして実習生自身、積極的に関わる事が出来るのではないか。2、3年の時に自らボランティアとして教育現場に貢献することで、教育現場にもボランティアとして実習生を受け入れてあげたいという気持ちも生まれるだろう。また、受け入れ校で会う人すべてが、実習生の成長を願って善意のボランティアで実習を支えているのだということも身をもって理解することが出来るに違いない。大学側も実習を特別の体験として位置付け、教育現場との長期にわたる協力体制を含めて学生に十分に事前説明しておく必要があるだろう。

現在ほとんどの大学では、4年生になってから日本語教育実習を始めているようだが、それでは、外国人児童やその保護者が実習生に対して何を「期待」しているのか、また実習生としてどうその「期待」にこたえる事が出来るのか、明らかにすることは難しい。4年間という限られた時間の制約の中で、文部科学省の「教員養成の基準」を参照しながらも、固定観念にとらわれない柔軟なプログラムの開発が求められているのだと思われる。

6.3. より社会に開かれた実習プログラムをめざして

日本語教育実習が大学の日本語教師養成プログラムの一部と位置付けられていることから発生するもう一つの問題は、実習生の受け入れが大学生に限られてしまうことである。法務省入国管理局の統計によると、2004年時点で日本に住む外国人は登録されているものだけでも191万人を越えている。近年の傾向として、定住型外国人の増加が指摘されているが、それにもなつて初等・中等教育で公立・私立校および養護学校などに通う外国人児童生徒の数も急増している。文部科学省初等中等教育局国際教育課の調査結果によると、我国の公立小・中・高校などに在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒の人数は、19042人とされており、その対応の遅れが指摘されている。(文部科学省 2004) 同報告書によれば、市や教育委員会、学校から依頼されて外国人児童の教育に携わる日本語指導員も少しずつではあるが増えてきているようだ。しかし、初等・中等教育機関において日本語指導員を常時配置できる学校はむしろ稀であり、すでにいる教科担任が、自分の専門外であるにもかかわらず必要にせまられて放課後などにボランティアで日本語を教えているのが現状のようである。このような状況は、大学での専門的な教育を受けた日本語教師の供給が初等・中等教育の現場で発生している需要に追いついていない現状を如実に反映するものであり、「教育実習」を経ずに日本語教育に携わっている現職教師が多数いることを物語る。実際、大学で日本語教育の専門教育を受けずに、多くの教師が日々試行錯誤をしながら現場の課題に取り組んでいるのが実情であり、近年筆者のもとにも教授法やカリキュラム、教科書などについての問い合わせが多くくるようになった。本来ならば、日本語教育に携わる教師は大学にもどって専門的な訓練を受けるべきであるとは思いますが、現実には他教科を専門とする現職教師にそこまで要求するのは難しい。

このような社会的な背景を考えたとき、国内にあるインターナショナルスクールとして地域に貢献できることは、これまでの大学などとの連携を保ちながらも、大学生以外の社会人にも独自に「教育実習」の門戸を開くことではないかという結論に至らざるを得ない。高等教育機関で専門的な教育を受けたものが、初等・中等教育段階での児童生徒の日本語教育に携わるのであれば根本的な解決には繋がらないことを承知しながらも、当面の状況を緩和するためには大学や日本語教育機関が協力しあいながら現在存在するリソースを大いに活用していくことが大切ではないかと考えるのである。このような観点で言えば、地域貢献の一貫として本校が出来ることは、大学の教員養成課程の一部としてではなく、本校が主催する独自のプログラムとして主体的に実習生を一般からも公募する形を模索することではないか。外国人児童の増加にみられるような今日の多様化した学習者のニーズに対応するためには、大学生のみならず、現場の教師をも積極的に受け入れる体制を「受け入れ校」自ら整えていく必要があるのではないかとと思われるのである。もちろん、これは、大学生を実習の場から排除しようとするものではない。なぜなら、必要に迫られて技術を学びに来るであろう社会人が教育実習の現場にはいることは、これから社会人となる大学生にとっても大きな刺激となるのではないかと考えるからである。

外国人児童を専門に教育する機関である国内のインターナショナルスクールには、ゼロ初級からネイティブなみの日本語力をもった生徒まで存在しており、国内の初等・中等教育機関に在籍する定住外国人児童への日本語教育にも応用できるノウハウを蓄積してきている。そのことから言っても、インターナショナルスクールでの教育実習は、初等・中等教育で日本語教育に携わっている現職の教員にも即効薬としての実習経験を与える事が出来るだろう。また逆に、教育実習で生まれた地域の現地校の教諭たちとの教育実践を通じた交流は、将来地域の研究ネットワークとして機能するならば、インターナショナルスクールの教育を後々に渡って豊かにする可能性も秘めている。初等・中等教育段階での児童学習者に対する日本語教育については、近年、第二言語習得の見地から研究が進みつつはあるが、はっきりとした日本語学習の目的をもった留学生や大人の学習者とは根本的に問題のあり方が異なり、その教育法についてもまだ十分な研究が進んでいないといえない。現職教諭との間の連携によって、指導法など

についてより多くの事例やデータを蓄える事が出来れば、日本語教育の新たな知見を得る手掛かりにもなるだろう。大学生に限らず「日本語教育実習」を必要とする全ての人を対象にした包括的な教育実習のあり方、及び、地域の拠点としての主体的な試みが求められているのではないかと思われる。今後の課題として取り組んでいきたい。(8)

<注>

- (1) 例えば、金久保紀子(2001)など。
- (2) 「大阪インターナショナル・スクールと大阪外国語大学国際文化学科日本語講座の交流に関する一般的協定書」は、当時、国際文化学科日本語講座・講座主任であった三原賢一教授と本校の Head Master であった Stephan Middlebrook との間で 1996 年 5 月 29 日に取り交わされている。
- (3) 興味深いことに、この交流協定の中では「教育実習」という言葉は使われてはいない。「教育実習」に限定せず、より大きな視野から高等教育機関と中等教育機関の間の交流を目的としたものと考えられる。2003 年度より、大阪外国語大学と本校の姉妹校である「千里国際学園・中等部高等部」との間で、高校生が大学の授業を履修できるようにした「高大連携」事業がスタートしたが、外大と OIS 日本語科との交流も両校の関係を深める一つのきっかけとして寄与している。
- (4) 大阪外国語大学のホームページ等で確認した。
- (5) 本校の教育、特にインターナショナルバカロレアのプログラムについては、拙論(2002a)及び(2002b)を参照していただきたい。
- (6) バイリンガルの生徒に対する本校の日本語教育の実際については、拙論(2003)及び(2005)を参照されたい。
- (7) 他の学年の一週間あたりの時間数は、1-2 年生は毎日 30 分の授業で 150 分、9-10 年生は、55 分の授業が 3 回で 165 分、11-12 年生は、55 分の授業が 4 回で 220 分となっている。
- (8) 2004 2005 年学校年度より、社会人をはじめとする外大以外の希望者にも門戸を広げ「公募制」による日本語教育実習をすでに開始している。OIS 日本語科によるこの新しい試みについては、また別の機会に報告できればと考えている。

<参考文献>

岡崎敏雄・岡崎眸(1997)『日本語教育の実習 理論と実際』アルク

岡崎眸(2002)「内容重視の日本語教育 多言語多文化共生社会における日本語教育の視点から」科学研究費補助金研究成果報告書『内省モデルに基づく日本語教育実習理論の構築』pp.322-339

金久保紀子(2001)「第 2 回日本語教育実習の報告」東京家政学院筑波女子大学紀要第 5 集 pp.117-123

亀田千里、金久保紀子(2003)「教育実習の改善を目指して」東京家政学院筑波女子大学紀要第 7 集 pp.105-113

中島和子(1998)『バイリンガル教育の方法』アルク

名古屋大学大学院・国際言語文化研究科「日本語教育実習報告」
<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/nichigen/menu5.html> (2003 年 12 月 31 日に採録)

「特集-日本語教員養成をめぐって」『日本語教育』63号 1987. 10

原和久(2002a)「IB の教育理念と Middle Year Program」『研究紀要』7号 学校法人千里国際学園 pp.85-93

原和久(2002b)「IB MYP/PYP の導入に向けて」『研究紀要』7号 学校法人千里国際学園 pp.94-102

原和久(2003)「インターナショナルスクールにおける上級日本語教育の試み」『研究紀要』8号 学校法人千里国際学園 pp.95-125

原和久(2005) 岩波ジュニア新書『創作力トレーニング』, 岩波書店

法務省入国管理局(2004)「平成14年末現在における外国人登録者統計について(概要)」

真嶋潤子(2000a)「日本語教員養成における模擬教壇実習 -学ばれたことと学ばれなかったこと-」『多文化共存時代の外国語教育・学習研究成果報告書』大阪外国語大学異文化共存時代の外国語教育研究会 pp. 108-127

真嶋潤子(2000b)「日本語教員養成課程における教育実習の現状と課題 -過去5年間の報告-」『大阪外国語大学論集』第23号 pp.87-100

文部科学省(2004)「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査」

文化庁(2000)「日本語教育のための教員養成について」日本語教員の養成に関する調査研究協力者会議報告

渡辺美乃里・天野聡子(2003)「大阪インターナショナルスクール実習報告」『日本語講座年報2002-2003』大阪外国語大学・日本語講座 pp.15-25

堀口純子(1992)「日本語教育実習指導のための基礎研究」『日本語学』78号

齋藤令子・田中京子・今尾ゆき子・出口香・稲葉みどり(1992)「日本語教育実習への提言 実習経験を踏まえて」『日本語学』76号

石田敏子・堀口純子・砂川有里子・西村よしみ(1993)「日本語教育実習に関する実証的研究」『日本語学』79号

資料1 大阪外国語大学との交流協定書・原本の写し（日本語）

大阪インターナショナル・スクールと大阪外国語大学国際文化学科日本語講座の交流に関する一般的協定書

学校法人千里国際学園大阪インターナショナル・スクール（以下 OIS）と大阪外国語大学国際文化学科日本語講座（以下外大日本語講座）は、両校の教育研究の協力と交流を促進するために、ここに OIS と外大日本語講座との交流に関する一般的協定書を作成する。

1. 両校は特に次の諸活動を奨励する。
 - 1) OIS は外大日本語講座に対し、日本語教員養成のための協力を行う。
 - 2) 外大日本語講座は OIS に対し、カリキュラム開発、教員研修のための協力を行う
2. 全校の諸活動については、両校で協議して行う。
3. この協定書を変更また改称する場合には、両校で協議して行う。
4. この協定書は、日本語と英語で作成され、両文書は等しく正文である。

1996年5月29日

1996年5月29日

学校法人千里国際学園
大阪インターナショナル・スクール
校長

大阪外国語大学
国際文化学科日本語講座
講座主任

*原本には、当時の本校校長 Stephan Middlebrook と外大日本語講座講座主任・三原賢一教授のサインが記してある。

資料2 & 3 実習生による単元案と授業案のサンプル

取り組みの具体例を紹介するために、ある年度に実習生が書いた単元案（資料2）と授業案〔第一時限目〕（資料3）を掲載する。尚、2002-2003年度より、大阪外国語大学日本語講座による「日本語講座年報」が発行されるようになり、実習生の実習報告の場が広がった。ここに資料としてあげる単元案と授業案についても同年報に概要が掲載されている。（渡辺・天野 2003）

単元案

資料2

テーマ：好きなレストランを紹介しよう

実習生：渡辺美乃里

学習者：5年生と6年生の合同クラス 生徒の人数； 5人

学習目標： 場所や道順の説明を聞いたり、話すことができるようになる
テ形を使った表現を理解し使うことができるようになる

導入語彙：（店、建物等）スーパー、銀行、病院、郵便局、駅、バス停、レストラン、本屋さん、
パン屋さん、交番、ガソリンスタンド
（道路上の目印等）かど、橋、交差点、横断歩道、信号、陸橋
（方向）北、南、東、西、右、左、右側、左側、まっすぐ、～m、次の、前の
（動詞）行く、歩く、まがる、わたる、出る、こえる、通る、通りすぎる、
～にあります、～があります

文法：テ形、タ形、～に、～へ、あります

教材：フラッシュカード、地図（板書用、ワークシート用）、ワークシート 「何があるかな？」、ワークシート 「いっしょにホームパーティーをしよう」、ポスター

参考図書：『モジュールで学ぶ よくわかる日本語』アルク
『続・クラス活動集 131』スリーエーネットワーク

評価方法：授業の最後に自分の好きなレストランについてポスターを作り、紹介する。
そのポスターを作る過程と発表で評価し、また、生徒からもコメントを集め、お互いに評価する。

活動内容：

- < 1 限目 > 語彙導入とテ形の復習 & 地図と Direction を使ったゲーム（導入語彙とテ形の確認）
- < 2 限目 > 会話の練習（ホームパーティーについてのスクリプト）
- < 3 限目 > ワークシートの作成（ポスターの下書き）
- < 4 限目 > ポスターの作成（好きなレストランについて道順などの紹介）
- < 5 限目 > 好きなレストランについてみんなの前で発表

1 授業目・授業案

資料 3

実習生； 渡辺美乃里 学習者：5年生と6年生の合同クラス
 日本語レベル； 中級 生徒の人数； 5人
 学習項目：場所や目印、道順などについての語句の導入、テ形の復習
 目標： 学習の雰囲気作り、教師、生徒間の信頼関係を築く
 テ形を使った場所や道順の説明を理解できるようになる

時間	学習内容	教師の指示	生徒の活動	教材/教具/ メモ
0:00	語彙導入 フラッシュカードを使って新しい語彙の導入、意味の確認をする。	・語カードの提示 意味の確認をしながら読ませる (スーパー、銀行、病院、駅、バス停、かど、橋、横断歩道、信号、交差点、北、南、東、西、右、左、まっすぐ、行く、まがる、わたる、出る、こえる...) ・語カードの提示 (T-S)	・全S 語カードを読む ・S1～5 語カードを読む	フラッシュカード
0:05	テ形復習 フラッシュカードを使って既習のテ形を復習する。	・導入語句を辞書形で言う テ形で言うように一人ずつ指示 「まっすぐ行く」 「右にまがる」 「横断歩道をわたる」 全Sに順番に指名する	・テ形に直して言う S1「まっすぐ行って」 S2「右にまがって」 S3「横断歩道をわたって」	フラッシュカード
0:08	導入語句の確認 地図で示しながら、動詞などの確認をする	・地図でまがることを示しながら語句を言い、リピートさせる 「右にまがる」 「横断歩道をわたる」 ・地図で行動を示し、Sに語句を言わせる	・全Sリピートする 「右にまがる」 「横断歩道をわたる」... ・全S 示した行動を語句で答える 「信号をこえる」 「学校を出る」...	地図
0:15	練習 道順を言う練習をする	「駅からコンビニまでどうやって行く？」と質問する	答える	地図
0:20	ワークシート (読解) 導入した語句、テ形の文の Direction を読み、地図上の場所を答えさせ、理解しているかどうか確認する	・地図とワークシート を配る ・ワークシート を読んで、答えを書かせる ・巡回し、どれくらいできているかを見る	・Direction を読んで答えを考える	地図 ワークシート (Direction カード)
0:40	確認 Direction が理解できたか確認する	・答えを発表させる S1に指名し、Direction を読んでから、答えを発表するように指示する S2～S5まで指名する	・S1 Direction を読んで答えを発表する S2～S5発表する	
0:50	宿題 (ワークシート) の指示 Direction 3 問に答え、学習内容の確認をする	・宿題用のワークシートを配布し、家でしてくることを指示する	・ワークシートを受け取り、家で解いてくる	ワークシート

資料4 筆者が担当した実習生による単元一覧

筆者の担当クラスが年度によって変わっている為、実習生が教壇に立ったクラスも年度によって様々である(3年生～10年生)。また、実習生がいくつかのコースで教壇実習したかも年度によって幅があるが、平均で二つから三つのコースで異なる単元に取り組んでいる。下記の単元リストはその一部を並べたものである。尚、本校では、二つの学年をあわせて一クラスとしているコースもある。下記の授業は、いずれも当時は二学年合同で言語的な背景の似通った生徒をあつめ一つのコースとして運営されていた。コース設定の各年度の詳細については、OIS日本語科のホームページを参照のこと。
(<http://www.senri.ed.jp/departments/jsl/>)

ES 3/4年生 初級日本語レベル	MSB 7/8年生 中級日本語レベル
<ul style="list-style-type: none"> ・家族を紹介しよう(1997 Y.A.さん) ・世界の国の国旗についてしらべよう(1998 I.M.さん) 	<ul style="list-style-type: none"> ・「イリオモテヤマネコ」(1999 F.M.さん) ・慣用句カルタであそぼう(2000 H.K.さん) ・壁新聞をつくろう(2001 N.S.さん) ・Eメールで友達をつくろう!(2002 W.S.さん) ・ストーリーテリング 日本の昔話「かさじぞう」の紹介(2003 W.M.さん)
MS 5/6年生 中級日本語レベル	HS 9/10年生 上級日本語レベル
<ul style="list-style-type: none"> ・オノマトペかるた(1997 Y.A.さん) ・標語を書こう(1998 I.M.さん) ・新聞をつくろう(1999 F.M.さん) ・体をつかったことば(2000 H.K.さん) ・ホットケーキをつくろう(2001 N.S.さん) ・町で見かけた看板・標識(2002 W.S.さん) ・好きなレストランの紹介。道順の言い方(2003 W.M.さん) ・日本の年中行事(多文化カレンダーをつくろう)(2004 B.A.さん) 	<ul style="list-style-type: none"> ・詩を読む(1997 Y.A.さん) ・短歌を詠もう(1998 I.M.さん) ・「犬に名まえの無い社会」(1999 F.M.さん) ・相田みつをの詩を読む(2001 N.S.さん) など

資料5 研究授業でのコメントシート

先生方へ

日本語科で教育実習されている、大阪外国語大学4年のHKさんの研究発表授業を今週木曜日と金曜日に行います。HKさんには、小学生と中学生の混合クラスMS-2(5/6年)と、中学生のクラスMS-C(7/8年)の二クラスを担当してもらっています。研究発表授業の場所と時間は下記の通りです。もし、お時間がありましたら、ぜひ来ていただき実習の成果へのご教示をいただければ、幸いです。よろしく願いいたします。 日本語科 原

クラス名	曜日	時間	部屋
MS-2 (5/6年)	金曜日	10:00 - 10:45a.m.	Rm. 2 1 3
MS-C (7/8年)	木曜日	9:45 - 10:40a.m.	Rm. 3 1 5
..... <切り取り線>			

もしよろしければ、研究授業の感想や実習生へのアドバイスをお書きください。記入のあと本人または原に渡していただければ幸いです。ご協力感謝いたします。

先生のお名前: 大迫奈佳江 担当教科名 日本語 見学した授業;(MS-2 , MS-C)

コメント:
 (「耳」「鼻」「目」などの言葉がはいった慣用句やことわざを使って、生徒たちにスキットを作らせる授業について...) 女の子3人のグループはすでにスキットの原稿が出来上がっていたようで、かなり余裕のある発表準備をしていました。(中略) 慣用句やことわざを日常生活の中に入れるのは、子供にとってかなり高度な技術かと思います。質のよいスキットを作るのは難しすぎるのではないかと思います。発表手順を追って意味、使い方の経験をさせていたのはとてもよい学習方法だと思います。特に「耳鼻科」「眼科」などの言葉を使ってグループを作っていたのは、すばらしいアイデアだと思います。欲を言えば、スキット作成以前に心構えのようなものを話し、どのようなものを期待しているのか、どのような語彙を使うべきか、話をしておくともよいかもかもしれません。(これは、私自身も常々反省させられる点です) 面白い授業だったと思います。ご苦労様でした! (原文は手書き)

資料6 「大阪外国大学・教育実習成績評価表」(一部を抜粋して作成)

I 事項別評価					
評価項目	評価の主な着眼点			評価	
学習指導	基礎学力	板書などに誤字がなく、適切な言葉を使用でき、基礎的な学力・知識があるか、など。			A B C D
	教材の研究	授業ごとに綿密で周到な教材研究が行われたか、創意・工夫があったか、など。			A B C D
	指導の技術	指導目標を明確に自覚した計画的な授業展開がなされたか、生徒の程度に応じたわかりやすい指導がなされたか、など。			A B C D
	指導の態度	指導者としての心構え、教えることへの意欲、適切な音声、話し方など。			A B C D
生活指導など	生徒の観察と理解	生徒ひとりひとりを公平に理解しようとしたか、生徒の中にとけこもうとしたか、など。			A B C D
	生徒の生活指導	実習校の生活指導の方針を理解し、協力できたか、問題行動への理解、など。			A B C D
	教科以外の教育活動への参加	ホームルーム、クラブ活動、学校行事などに意欲的に参加・指導できたか、など			A B C D
勤務状況	勤務態度	欠勤・遅刻・早退の有無を含む勤務のまじめさ、実習生としての節度ある態度、など。			A B C D
	実務能力	学級運営上の事務処理能力、教室等の環境整備、など。			A B C D
	実習記録その他の提出物	実習記録簿、学習指導案などの提出物の内容の充実度、など。			A B C D
	人間関係	教職員や他の実習生と円滑で協力的な人間関係を保てたか、など。			A B C D
II 出勤状況					
実習期間	出席すべき日数	出席日数	欠席日数	遅刻・早退回数	
自 月 日				遅刻 回	
至 月 日	日	日	日	早退 回	
III 総合評価					
評点	所見				
A B C D					

資料7 大学側への質問と質問に対する回答

下記は、大阪外国語大学の真嶋潤子教授より2003年10月13日にEメールにてコメントをいただいたものである。

質問

1996-2003年の間に、約23名の外大の生徒がOISで日本語教育実習を受けています。1996年に取り交わした「交流協定」を振り返り、大学にとってどのような成果があったとお感じになりますか？(もしくはどのような課題/問題点をお感じになりましたか？)また、他の教育機関と比較して、OISで実習することは、大学にとってどのようなメリットがありますか？

回答

1 学生へのメリット
 ・非常に大きいです。外大にいても、日本語学校などへ行っても得ることのできない、ユニークな教育機関なので、ほかでは得がたい貴重な体験をさせてもらっています。
 ・「子どもが好き」だけではやっていけないこと、現場で求められる能力や資質を実体験できることで、自分の進路決定にも役立っています。
 ・担当の先生と1対1で内容の濃い指導を受けることも、大学はもちろん他では得がたいことです。生徒さんへの接し方の面、教材・教授法などの面、また教育現場の事務的仕事などの実務はもちろん、日本語教育の専門家としての先生方の生き方からも様々なことを学んでいるようです。
 ・卒業後もお世話になっている学生もいるようで、ありがたく思っております。

2 実習の遂行に当たって
 ・OISの先生方の柔軟性によって、日程や担当クラスなど、学生一人一人に合わせていただいていることは大変ありがたいです。学生の自主性や希望も尊重していただいているようで、学生の自立性・責任感をはぐくむ上でもプラスになっていると思います。
 ・大阪外大では年少者への日本語教育の専門家がいらないこともあって、学生も児童生徒に対する場合の基礎的な知識

もないまま実習に参加させていただいている場合が多いと思います。大学のほうでの実習前教育の不備を申し訳なく思っております。

3 その他

・実習生以外の外大の学生にも、公開授業などで見学の機会を与えていただいていることも、大変ありがたいことです。実際の教育現場を見学する機会は非常に限られているのが実情です。

資料 8 実習生に対するアンケート調査 回答結果

1. 現在どんな仕事に従事されているか、近況を教えてください。 (学生の方は、大学でどんなことをされているか書いてください。)

本文中の表1を参照のこと

2. 実習終了後、どのような経緯で現在の職に関わるようになったのか、もしよろしかったら教えてください？

本文中の表1を参照のこと

3. 実習をやってみて、率直に良かったと思いますか？ もし、良かったと思われる場合、どんなことが、実習後の人生で自分自身の役に立っていると思いますか？

- ・ 大変役に立ったと思う。様々な年齢、人種、レベル、動機の学生に教えることによって、多様な場面に遭遇する経験ができた。特に貴重だと思われるのは、しつけの必要な子供たち楽しく教える方法や、動機の薄い思春期の学生をどうひきつけるかなど。頭を悩ませたことが、現在そのまま使えるわけではないが、いい経験となっている。
- ・ 2週間という短い期間でしたが、実際に人の前に立って教えた経験があるのだと思える事は教室内でとても心強かったです。
- ・ 日本語教師としての実践勉強ができてよかった。
- ・ 教育実習は、大変いい機会だったと思います。実習をするまで、実際に教育現場で教えてみたことがなかったので、これから本当に日本語教師としてやっていく時の良い心積りになっていると思います。
- ・ とても良かったと思います。授業をする上でのコースデザインの仕方や、教案の書き方などを教えていただき、それらが実際の仕事でもとても大切だと改めて実感しています。
- ・ 授業前に教案を作成しても、実際の授業は教案どおり(予想通り)にはいかないということを経験し、教師の臨機応変さの必要性を実感した。また、実習中にはいろいろな先生方の授業を見せていただいたが、レベルに応じた実際の(現場での)指示の出し方やタスクなどは大学の授業では見ることも経験することもなかったので、大変勉強になった。

4. 実習中に使用した教材や教授テクニックなどで、現在の職場でも活用されていることはありますか？

- ・ 原先生に「視覚に訴えることの大切さ」を教えていただいた。学生の理解能力に合わせて、こちらの言語レベルを調節すること。学生を見て、レベルや興味に合わせて教材を選んだり、教え方も工夫すること。
- ・ 実習中は小中学生に教えました。現在教えている国では大学生(ゼロ初級)とOISの生徒とは年齢もレベルも全く異なっていたので、実習中に使用した教材や教授テクニックを参考にすることはあまりありませんでした。ただ実習中に「授業中に指名する生徒に偏りがあるので、どの生徒も平均的に指名するように」と御指導頂いた事もあり、現在教えている大学で授業をする際には、出来る限りどの学生にどのような質問をしたかを記録するようにし、同じ学生ばかり指名しないように、また同じ学生に同じようなタイプの質問をしないように心掛けました。
- ・ 現在日本語を教える上で、特に生徒との接し方、ほめ方という点で実習が実践にいかされていると感じる。生徒の歳、学習背景などが異なるため、すべてがいかされたとは言えないが、実際に教壇に立ち、実習担当の先生から指導をうけながらやってみることができたのはよかったと思う。また、実習では自分の好きなように授業をさせてもらったので、アイデアや素材をさがすのに苦労したことも勉強になった。
- ・ 今はまだこちらで実習をしていないので何とも言えませんが、これから行うアクティビティや授業内容をいかに分かりやすく導入するかということに、重点を置いていきたいと思っています。OISでの実習のときは、これが案外うまくいかなかった。前の経験を生かしていきたいと思っています。
- ・ 特に中級のクラスの場合、大きなテーマを決めて、その中で教える文法や語彙などをまとめていくことなど、教えていただいた授業計画の立て方を活用するように心がけています。
- ・ 現在は教壇に立って教えるということはありませんが、次回教壇に立つ際には授業の時間配分や流れを考え、学習者にもより配慮しながら授業ができるのではないかと思います。

5. 実習を通して、「日本語」を教えるという点で、学んだこと、あるいは認識を新たにすることはありますか？

- ・ 子供のクラスで、とてもやる気と集中力のある生徒と、集中力がなく、宿題もしてこないような生徒がいて、どの学生に合わせてやればいいのかわからなかった。そこで、クラスの生徒の能力差、レベル差にどう対応するかが難しいと

思った。また、日本の義務教育などと違い、学習指導要領などが決まっていないので、教師が自由に教材を選び、教え方もまかされているという点で非常に奥が深く、教師一人一人の責任の重さを感じた。

- ・ ネイティブである日本語教師(私)が予想していないところで外国語として日本語を学んでいる学習者(学生・生徒)が疑問を持つ事が結構あると感じました。教案を作る時点でここは時間をかけなければ理解してもらえないだろうと思っていた部分が案外簡単に終わってしまったり、詳しく解説・説明をする必要が無いと思っていたところで生徒が分かっていないような表情を見せることがあったので戸惑いました。今でも教室の前に立つ時はいつどのような質問をされるだろうか、とその点ではとても緊張してしまいます。日本語を教えることの難しさを改めて感じた。と同時に子どもに教える楽しさも感じられた。また、自分の話し方の癖もみつけれられた。
- ・ 日本語を学ぶ人すべてが、学びたくて学んでいるわけではない(例えば両親の都合でやむなく日本に来ざるを得なかった、など)ということ、実習中に改めて認識させられました。だから、いかに生徒を引き付ける授業が大切になってくるのかを実際に体験できたのは良かったと思います。
- ・ 文法や語彙などを提示するだけではなく、実際に言わせたり、書かせたりして、全生徒に確認することが大切であるということ。また、生徒一人一人のレベルを把握し、それぞれ確認したり、対処したりすることが、上手くできるようになりたいと思いました。
- ・ よく言われることですが、「日本語を話せる人 日本語を教えられる人」ではないことを実感しました。(日本語に限らず、ある言語の母語話者はたいていその言語に関して直感で文法的におかしいかおかしくないかなどを判断するが、言語を「教える」際には言語についてそれ以上の認識が必要となるということ。学習者の質問などによって、母語話者が当然だと思っていたことが言語を「学ぶ」者にとってはそうでないということに気づかされること。)また、学習者のモチベーションなどに応じて、どうしたら日本語や学習テーマに興味を持たせられるかを考えることも重要だと感じた。

6. 実習後、「教育」や「教えること」に対して、何か考えが変わりましたか？

- ・ 子供や思春期の学生に教える場合、教える内容を準備することと同時にクラスコントロールができるようになることが大切だということ学んだ。大学では文法内容や教授法を学んでいたが、しつけなどは実際に教えないと身に付かないと感じ、小学校などで先輩の先生方が子供の扱いが上手な理由がわかった。
- ・ 教室の前に立って話す時(特に自分の考えなどが含まれる場合)にはその内容一つ一つに注意を払い、責任を持たなければならぬと思うようになりました。教師が手を抜かず、限界に挑戦している姿に学生のやる気も反映してくるということもわかった。
- ・ 生徒のかわいさから、以前から中等教育で教えたいと思っていたが、その思いがさらに強まった。
- ・ 基本的には何も変わっていないと思いますが、実際に実習をやってみると、予想外の事態に直面する事が多く、「教えること」は考えていたよりも難しいことなんだということを実感させられました。
- ・ 「学生が求めているもの、必要としているものは何か」ということが教えるときに最も大切だということをもっと学ぶことができました。
- ・ 「教育」というものの難しさを実感したが、同時に「教えること」のやりがいの大きさも再認識した。

7. 実習中、大変だったこと、あるいは今後改善してほしいことはありますか？

- ・ 初めて教える経験をする場で、あれだけ様々な場面に遭遇できたことは貴重だったが、同時にめまいをおこすほど忙しくて、時間が全く足りなかった。準備をするのが本当に大変だった。しかし、それはどこの実習でも同じことだと思うので、改善しなくてもいいと思う。その人が卒業後どんな学生に教えるようになったとしても、経験しておいて損はないので、小学生から高校生まで、あらゆる年齢層の学生に教える経験をさせてもらえてよかったと思う。
- ・ 実習期間中の大部分、実習生は私一人で授業以外はほとんど一人で教室にこもって授業準備をする事が多く、授業などについて相談する相手も先生一人だけでとても心細かったと記憶しています。最後の2日間は外大からの実習生がもう1人来て、休憩時間などに少し話をしたりしてもいい気分転換になったので、実習“仲間”がいれば精神的なプレッシャーが少し軽くなる私のような実習生が他にもいるのではないかと思います。
- ・ OISの施設は大変充実していたので、その点で困ったことはなかった。
- ・ もちろん実習の準備などは大変でした。授業を録音したテープを聞く時間がなかなか取れなかったような気がします。あとやはり過去の実習レポートが大学ですぐ見ることができたなら良かったのにと思います。
- ・ 大学で勉強していたことと実習で求められることに、差があったと思います。実習でしか学べなかったことがたくさんありました。特にコースデザインの仕方や、教案の書き方などは、実習まで勉強することがなかったので、大変でした。
- ・ (改善してほしいということとは少し異なるのですが)私は実習前から授業を見学させていただいていましたが、それでも学習者のレベルの把握や指導項目の決定に時間がかかってしまったため、もう少し早い段階で先生とコンタクトを取り始めたり、既習項目などの確認に取り掛かることができれば良かったのではないかと反省しています。

8. 二週間という実習期間は、適切だったと思いますか？ そう思う理由も記してください。

- ・ 適切だと思う。受ける側としては体力的に限界かと思う。担当クラスを減らして期間を長くすることも考えられるが、あまり長居しては、担当の先生方にご迷惑ではないかと思う。
- ・ 初めて教えるということで精神的なプレッシャーも大きく、あと大学の授業もあるので2週間で適切だと思います。
- ・ もし可能ならば、もう少し長くてもよかったと思う。(ただしスクールの都合もあるので、あくまで意見ですが。)2週間で一つのトピックを終わらせるようにしたが、それを2回させてもらえればもっと勉強になると思う。そして、

生徒も教育実習生だからということで、割合きちんとした授業態度だったが、本来の姿がみえてくるかもしれないから。

- ・ 丁度いい期間だと思います。個人的には、もう1週間やってもいいなと思いました。はじめの1週間は学校や実習のサイクルに慣れるので精一杯になって実習に集中しにくいので、2週間だけだとちょっと短いなという気がします。あと他の学年の授業風景や発表会を見学できたのはとても良かったと思います。
- ・ 2週間だけでは短いと思います。実際に授業をさせていただくのは2週間だけであっても、それまでに他の先生方の授業見学をさせていただいたり、授業をするまでの勉強の時間が必要だと思います。
- ・ 2週間という期間は、実際終わってみるとすごく短い期間だったように思います。(学校側や先生方のご都合などもあるので、実習生を長く預かるのは大変だとは思いますが、)2週間という期間で多くのことを学んだのですが、実習期間が長いことで、「日本語教師」という仕事、「教育」についてさらに多くのことも学べるのではないかと思います。

9. 大学での、実習前の説明は十分でしたか？また、大学で学んだことを実習で十分に生かすことは出来ましたか？

- ・ 十分な説明を聞いていたとはあまり思えないが、受ける前の不安は少なかった。大学で学んだことを十分にとは言えないが少しは生かすことができた。
- ・ 大学ではあまり説明を受けなかったような気がします。大学では主に成人に対する日本語教育についての授業だったので、実習前に小中学生に対する日本語教育について勉強しておけば良かったと思います。
- ・ 説明についてはどうだったか忘れてしまいました。大学で学んだことを出せたところもあるが、大学では初等教育対象の模擬授業はなかったので、試行錯誤だった。しかし、これは実習で学べたということにもなるのでよかった。
- ・ 大学の方で実習の担当をしてくださるOISの先生の連絡先を教えて頂いて、あとは個人的に連絡をして今後の手順を決めていくよう説明がありました。もうすこしOISの情報が事前にあれば良かったと思います。実際、実習に行くまで、OISのことはよくわかりませんでした。学校見学をする機会があればいいなと思います。
- ・ 実習中に学ばせていただいたことが、とても重要なことばかりだったと思います。大学でも、日本語教育について実践的な授業をたくさん選択でき、実習にいかせられるようであれば良かったと思います。
- ・ 大学での実習についての説明は4月に1回、その後1回程度だったと思います。実習前の授業観察や担当の先生方といつ頃から連絡を取ることが望ましいかなど(指導してくださる先生方もお忙しいと思うので)の説明もあれば良かったのではないかと思います。実習中は大学で学んだこと、その時点である知識などを自分なりに活用しましたが、実際に教えてみることで初めて分かるようなこともたくさん学びました。

10. なぜ、OIS日本語科を実習先に選ばれたのですか？ よろしかったら、教えてください。

- ・ 他に実習先の選択肢はなかった。なぜ実習を希望したかという質問でよければ、大学時代にできるだけ、実際の日本語教育場面に立ち合いたかった。経験がほしかった。後の就職にも役立つと思った。インターナショナル・スクールという場所に興味もあった。
- ・ 日本語教育の実習は機会がとて少ないのですが、OISには毎年外大生がお世話になっている実習プログラムがあるので、実習の希望を出しました。
- ・ 個人で選ばせいただいたわけではなく、学校の授業の一つで、先生方の紹介で実習させていただいた。実習先として協力してくださる学校が多数あり、希望する対象の学習者がいる学校を選べるというかたちになればいいと思うが、それは今のところ難しいのではないかと思います。
- ・ まず、自宅から割と近くで時間的にも余裕が持てるということが第一に挙げられます。それから、インターナショナルスクールという、一般の日本語学校でない環境で教えてみたかったからだと思います。大学の先生方も『特殊な環境』とおっしゃっていたので、たいへん興味を持ちました。
- ・ 教える対象が大人ではなく、子供に教える方を勉強したいと思ったからです。
- ・ 日本語教育の実習が経験できる唯一の教育機関だったから。(私のOISでの実習が決定した後、去年は大阪の日本語学校でも1人実習生を受け入れてくれるということが決まりました。私は成人教育よりも学校教育により興味があるので、もし選択肢に日本語学校が含まれていてもOISを実習先として希望したいと思います。)

11. 最後に、現在の時点で実習を振り返って思うことや感想、もしくは考えたことなど、もしありましたらどうぞ自由にお書きください。

- ・ あのような短期間の間に、あれほど内容の濃い実習を経験させていただいたことを本当にありがたく思います。卒業後、国内と国外で6年ほど日本語を教える機会をいただいています。あのときほど様々な学生に会うことはありません。教師というのはどんな生徒が来ても、合わせて何かを与え、その人を伸ばす方向へ持っていくという本当にやりがいのある仕事だということを実習で教えていただきました。実習でお世話になった原先生はじめ、ワイントラップ先生、大迫先生にお礼を申し上げます。ありがとうございます。
- ・ 初めて人の前に立って教えるということで必要以上に緊張してしまい、授業内容、授業内容共に今思い出しても恥ずかしい限りですが、先生や生徒さんたちの御協力でもとてもいい経験をさせていただきました。
- ・ 日本語教育の分野で実習をさせて頂ける学校はまだ少ないので、日本語教育を学ぶ大阪外大生にこのような素晴らしい機会を与えてくれるこのプログラムを今後も続けて頂けるととても嬉しく思います。
- ・ はじめ一クラスの生徒数がすごく少なくとても学習環境がいいと思ったが、その中でもいろいろ問題を抱えている生徒が多く精神的に落ち着きがない年頃なので教えるのも難しいとわかった。そして、そういう生徒にうまく耳をかたむけられるようになりたいと、今教えながら同じように思う。

- ・ 授業をする中で、生徒はその授業内容を聞いている訳ですが、同時に自分という人間自体も見られているんだということを感じました。私も学生の立場なら、授業を聞きつつ、『この先生、どんな人かな』と少なからず見ていると思います。だから、自分が先生になった時に『この先生はあんまりいい先生じゃないけど、授業は大事だから聞いておこう』と思われるのは結構辛いと思うので、ある程度自分の中身を磨いておこうと思うようになりました。
- ・ 実習中、実習直後にも、とても充実感がありましたが、今、実際に毎日教壇に立つようになって、実習で教えていただいたことが重要なことばかりであったことを改めて実感しています。日本語教師を目指す人には、ぜひ同じように多くのことを学んでほしいと思います。もし、私が OIS で実習をさせていただいていなかったら、今の仕事でもできないが増えているかもしれません。私の授業はまだまだ実習で築いた理想の授業には遠いですが、少しでも近づけるように、努力していきたいと思っています。
- ・ 実習前は自分が授業を行うことにとても不安を抱いていましたが、授業の回を重ねるごとにそういった不安や緊張感が和らいでいったような気がします。授業が自分の思い通りに進まず悩んだことも多くありましたが、そういうことも教壇に立たない限り経験できないので、OIS での実習はとても勉強になりました。私の実習を担当してくださった原先生をはじめ、いつも親切、丁寧にご指導くださった OIS の先生方に感謝しています。今後さらに OIS での実習が日本語教師を目指す人たちにとって有意義なものになるようお祈りしています。